



Title	京都市立陶磁器試験所における西洋釉薬の研究と応用 ： 事業報告を手掛かりに
Author(s)	上村, 友子
Citation	デザイン理論. 2017, 70, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/65053
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

京都市立陶磁器試験所における西洋釉薬の研究と応用

— 事業報告を手掛かりに —

上村友子／京都工芸繊維大学大学院

京都における西洋釉薬を使用した輸出陶磁器

明治維新後、輸出陶磁器業の発展を支えた技術に西洋釉薬の応用があげられる。当時の製陶業者の作品に見られる釉薬や彩料の進歩は、製陶業者の能動的な研究姿勢による製品づくりが行われた結果、急速にその技術が発展普及していたことを示している。しかしその進歩の経過を示す記録は少なく、現在においても当時の釉薬技術には不明な点が多い。本稿では京都陶磁器業界の振興と西洋の近代的製造技術の導入を目的として明治29(1896)年に設立された京都市立陶磁器試験所¹(以下、市立試験所)で記された資料を中心に、京都における西洋の窯業技術、とりわけ彩料釉薬の受容の経過を概観したい。

ワグネルによる京都舎密局での釉薬指導と市立試験所の関係

日本の窯業界発展に貢献した人物としてゴットフリート・ワグネル(1831-1892)は高名な人物であるが、市立試験所とワグネルは直接的な関係が見られない。しかし、ワグネルが日本にとって特に貢献の多かった期間として、明治11(1878)年から明治14(1881)年までの3年間、京都舎密局において化学工芸の指導に当たった時期が挙げられる。ここで行われた工芸指導では「瑠瑯及磁器彩料色素製煉法」「瑠瑯彩料調合録」「磁器彩料調合録」など陶磁器の彩料釉薬についての講義も行っていたことがわかる。京都舎密局が廃止されたのち、ワグネルは東京へ移住し大学で教鞭をとる。ここでワグネルの薫陶を受けた藤江永孝(1865-1915)と植田豊橘

(1860-1948)は、市立試験所の初代所長と二代所長を務めた。

市立試験所で行われていた試験内容がワグネル東京移住後の大学での指導を基盤にしていることは、教え子であった藤江永孝や植田豊橘らがその所長を務めたことなどから明らかである。また、実験内容や実際に使用した彩料釉薬などを詳細に示す資料は見つけないが、先述の京都舎密局で行われた講義内容を元に実験や応用が行われたということは想像に難くない。ワグネルの教授した陶磁器に関する化学的知識が明治後半の京都陶磁器業界を支えたことは確実と言えるだろう。

『本場創立沿革答申書』と『京都市立陶磁器試験場業務報告書控、明治30年度-明治42年度』

市立試験所当時の資料として残されているものは『本場創立沿革答申書(以下、答申書)』²、『京都市陶磁器試験場報告書控、明治30年度-明治42年度(以下、報告書控)』³があり、市立試験所の事業の概況を示している。

a, 『本場創立沿革答申書』

『答申書』の「標本類」の項目には、当時収集された国内外の陶磁器、原料、彩料、釉薬類、雑品の点数が記録されており、これから市立試験所は陶磁器、原料類のいずれも、内国の物より外国の物を多く所有していたことがわかる。

また、機械設備に関しては明治35(1902)年から明治37(1904)年に集中して外国産の機械が購入されていることが同資料の「主要

機械類」の項目より読み取ることができた。当時の市立試験所所長であった藤江永孝は明治32（1899）年8月より、農商務省実施の海外実業練習生として欧州に派遣されている⁴。明治34（1901）年以前は国内産の機械購入履歴しか残っておらず、藤江永孝の欧州視察以前はどのような機械を揃えるべきか模索している状態で、彼が欧州留学においてその有用性を吟味した外国産の機械は明治35年以降に集中して揃えられた。言い換えると明治35年頃の市立試験所では西洋式の設備は完備されたという状況ではなかったことがわかる。

このことから初期の市立試験所において西洋の輸入品は先に参考品としての完成した陶磁器や原料各種が大量にもたらされ、西洋式の機械設備の導入はこれらよりもやや遅れていたということが言える。

b, 『京都市立陶磁器試験場業務報告書控、明治30年度－明治42年度』

『報告書控』は明治30年度から明治42年度にかけて、市立試験所で行われた事業報告のほか、各窯の焼成回数や、試験依頼の内容と依頼者氏名、職員の氏名などが記されている。ここに記された試験依頼の内容を原料坯土専門業、成形着画釉薬専門業、焼成専門業に三大別し、その比率を確認したところ市立試験所で行われた試験の割合は主に明治30年から明治34年までは成形着画釉薬専門業に関するものが高く、明治35年以降は原料坯土専門業に移り変わる。この変化は明治30年代後半になるにつれ原料坯土専門業は成形着画釉薬専門業の倍程度の試験数が行われるようになり、より顕著となっていく。

市立試験所のとりわけ初期において、成形着画釉薬専門業に関する研究を多く取り扱っていたことが明らかである。

a, b の内容から市立試験所の初期の段階

において、主として進められた事業が釉薬に関する研究、とりわけ西洋の原料や彩料、釉薬の試作や使用方法に関する内容が中心であると言える。

おわりに

明治時代、外国から数千という規模で大量にもたらされた陶磁器用の彩料釉薬は、万国博覧会期の日本製陶磁器大量輸出の高揚とともに急速的に、その技術の受容や応用が行われた。しかし市立試験所の時代は研究成果としての論文や報告書などは残されていない。また、輸出事業の沈静化とともに、多くの釉薬研究が行われてきた事実までもが歴史の過程の中で等閑視され、当時の様相を示す資料の多くが失われつつある。

この資料の一部である、市立試験所において明治29年の開設から収集・試作された収蔵品などは、現在愛知県陶磁美術館に残されている。このほか、産総研には収蔵品目録には掲載されていない資料として数十万点を超えるテストピースが保管されており、研究の過程と成果が目に見える形で残された資料である。釉薬研究が盛んであった初期の市立試験所の試験内容を示す重要な参考資料として、テストピースの確認を今後の中心的な課題としたい。

- 1 明治36年に農商務省から認可を受け京都市立陶磁器試験場と改称しているが、本発表では京都市立陶磁器試験所と表記する。なお、大正8（1919）年に国立に移管され国立陶磁器試験場となる。
- 2 京都市立陶磁器試験所『本場創立沿革答申書』京都市立陶磁器試験所 1902年
- 3 京都市立陶磁器試験場『京都市陶磁器試験場報告書控、明治30年度－明治42年度』京都市立陶磁器試験場 1898年
- 4 藤岡幸二『藤江永孝伝』藤江永孝君年譜 故藤江永孝君功績表彰會 1932年